韓国における学校給食指導の実態
――中学校教員への聞き取りを中心として――

出　羽　孝　行

はじめに

今日，韓国では学校給食の無償化が大きな社会的関心事の一つとなっている。この根底には義務教育段階では食べることは学校（政府）が責任を持つべきだという考えに多くの国民が共通認識を示していることにあるように思われる。たとえば，学校給食が普及し始めた頃は給食業務を民間企業に委託する「委託給食」が広く行われていたが，大規模な食中毒事件を契機として学校給食は学校が責任を持つべきとの世論が高まり[(1)]，2006年に改正された学校給食法では学校が直接給食に責任を持つ「直営給食」が原則とされている。これらの点から垣間見えるのは，韓国において給食は教育の一環であるという認識である。給食が教育であるとするならば，教師は給食に関して教育指導を行う必要が出てくる。ただ，現実には昼食時間は教育とは関係のない時間と考え，児童生徒の給食活動に無関心な教師の問題もあるという[(2)]。こうした現実を解明するためには制度や政策を分析するだけでは限界がある。

そこで，学校給食に関する教師達の認識や実際の指導観を探ることで，韓国の教師の持つ指導観や教育観の特徴を明らかにしようと試みた。このことから韓国の教師の持つ特徴的な「教師文化」の一端を明らかにできるのではないかと考えた。今回は主に学校給食が行われる場所に着目し，そこで教師がどのように生徒の指導を行い，その指導をどのように認識しているのかを分析することとした。

研究の方法としては，2010年から2011年にかけて筆者が現地の中学校の担任教師と栄養教師（栄養士）に対して行った質的調査（インタビュー）の結果のうち，担任教師（以下，教師とする）分を分析していくこととする。

1　韓国の学校給食の現況と先行研究

(1)　本研究の位置づけと先行研究

石附は教育の実態・現実に迫るために比較教育学研究として比較を行うべき対象として，法規上の制度や政策と，社会的，文化的な制度や慣行を挙げ，後者を「教育風俗」と名付け，これに着目する意義について説いている。[3] 学校給食研究でいえば，政府や自治体の教育政策や教員制度の面から迫ることも考えられるが，石附のいう「教育風俗」への着目により，制度や政策では補足しきれない，教師文化，ひいては学校文化を明らかにする端緒となる可能性があると思われる。

次に学校給食に関する先行研究は日本のみならず，韓国でも数多く行われてきているが，教師の給食指導に着目した研究は限られている。学校給食指導における教師の認識に着目した研究として，白チョンジャ・劉サンフィは，京畿道と江原道の初等学校の教師447名を対象とした質問紙調査の結果を用い，教師は学校給食を栄養教育的側面と共同体生活指導の機会からも重視していることから学校給食の意義を明確に理解しているとしている。[4] 一方，金淑姫らは質問紙調査を用いて初等学校・中学校・高等学校の教師を比較したところ，中学校の教師が最も学校給食に対して否定的であり，理解が不足していたとする。[5] 初等学校の教師の学校給食への意識が高いのは後でみるように学校給食の歴史が中学校や高校よりも古く，教師の立場としても給食指導を教育の一環として受け入れる前提が揃っていることに加え，朴ムンギョンらがいうように中学や高校に比べて担任教師の指導下で給食が進められるからでもある。[6]

学校給食に対する教師の認識以外に本研究と関連する先行研究としては，配食場所[7]と関連した学校給食満足度研究を挙げることができる。これらの研究は，学校給食の効果や目的を達成するためには受給者である生徒の満足度を高める必要があるためとの視点に立って行われている点が特徴である。[8] また，こうした点からの研究は主に教育大学院の修士論文で取り上げられている。[9] これら先行研究では，衛生的理由や，食事の質，児童生徒の便宜性などの理由から食堂配食[10]が理想とされている。[11] 朴ムンギョンらによると初等学校の児童は食堂配食よりも教室配食を好む傾向が見られるとするように，[12] 学校種により若干の違いも見られるが，共通するのは研究者の側が食堂配食を理想としている点が特筆される。これはマスメディアでも同様であるし，[13] 政策を遂行する側にも快適な給食環境を作るために食堂空間を確保していくことが意識されている。[14]

これらの先行研究では，一人一人の教師の指導観を解明するまでには至っておらず，配食場所についてもいわば自明的に食堂配食が理想とされており，教師が実際に給食指導をするという観点から言及されたものはない。そこで，本研究は学校給食を教育の一環と見なすだけの条件が整っていない中学校を対象とし，[15] 学級指導に直接責任を持つ担任教師が持つ教育観・指導観を彼ら・彼女らへのインタビューによって明らかにしようとした。

（2） 学校給食の実際

韓国では学校給食への社会的関心度は日本と比べて高いといえる。それと関連して学校給食への関心も高く，その象徴が学校給食の無償化問題である。いわゆる低所得層への給食費免除は従来から存在していたが，学校給食無償化は親の所得に関係なくすべての児童生徒の給食を無償にする政策であり，2000年代に入ってから全面無償化計画が政治的争点となり，短期間のうちに国家の全般的な福祉政策の方向に対する論争として広がりを見せた。[16] 特に2011年8月にソウル市で行われた学校給食無償化に関する住民投票が規定投票数を満たさずに不成立に終わったという責任を取る形で，呉世勲がソウル市長を辞任した「事件」は，国家が子どもたちの「食」に対し責任を持つべきとする韓国の世論の高さを示したものとして注目される。[17]

法的にも学校給食は教育の一環との位置づけが明確になされている。2006年に全面改定された学校給食法の第三条では「国家の地方自治団体は良質な学校給食が安全に提供されることができるように行政的・財政的に支援しなければならず，栄養教育を通じた児童生徒の正しい食生活管理能力の涵養と伝統食文化の継承・発展のために必要な施策を講究しなければならない」としている。また，京畿道教育庁が発行する『学校給食管理実務』では学校給食の目的として，①成長期の児童生徒の正常な身体発達と活用に必要な栄養を提供すること，②偏食矯正や正しい食習慣指導，及び栄養教育，③共同体意識，及び社会性涵養，④国民の食生活改善に寄与することが示されている。[18] これらのことから韓国の学校給食は栄養教育のみならず，正しい食習慣を身につけることや，社会性の涵養まで目指されていることが理解できる。

韓国の学校給食の特徴としては，1990年代より量的拡大が始まったということである。表1からわかるように，初等学校（日本の小学校に相当）でも1991年現在で全国の13.3％の学校でしか実施されておらず，7.8％の児童しか給食の対象となっていなかった。それが1997年に給食実施校が全国の9割を超える

表1　1990年代以降の学校給食普及状況

年度	初等学校		中学校		高等学校	
	給食実施学校比率	給食実施学生比率	給食実施学校比率	給食実施学生比率	給食実施学校比率	給食実施学生比率
1991	13.3	7.8				
1992	16.3	10.2				
1993	38.2	24.0				
1994	37.1	22.3				
1995	71.1	50.4				
1996	88.4	67.9				
1997	97.3	79.7	8.6	4.9	9.8	2.6
1998	99.2	86.5	30.3	11.6	35.0	9.1
1999	99.6	86.1	42.1	30.7	96.3	57.4
2000	99.9	88.1	56.6	40.4	94.7	57.4
2001	99.9	90.7	72.5	58.6	97.6	64.3
2002	99.9	89.9	88.7	82.0	97.8	71.9
2003	99.8	92.3	95.9	92.7	98.4	81.8
2004	99.9	94.3	97.9	94.7	98.7	85.8
2005	99.9	95.3	99.0	96.1	99.0	87.7
2006	100.0	96.4	99.3	97.8	99.3	91.3
2007	100.0	97.7	99.5	99.1	99.5	96.5
2008	100.0	98.1	99.9	98.9	99.5	95.7
2009	100.0	98.9	99.9	99.5	99.8	96.6
2010	100.0	99.3	99.9	99.4	99.9	99.4
2011	99.9	99.6	99.9	99.7	99.9	98.5

【出所】韓国教育開発院『教育統計年報』教育科学技術部・韓国教育開発院、各年度より作成。年度により発行者、編者は異なる。

に至っている。中学の場合，給食実施校が9割を超えたのは2003年からである。初等学校の場合は1990年代，中高では2000年代以降，短期間に急速に量的拡大したのである。

また，学校給食法第四条に規定されるように，学校給食の対象は初等学校・中学校・高校までであり，原則として中学までである日本と比較しても学校給食の対象は広範囲に及んでいることも特徴である。

ところで，給食を実施する学校には原則として栄養士が配置されることが規定されているが，2003年より学校給食法，初・中等教育法を改正して栄養教師制度が導入された。原則として各学校に1名の栄養教師を配置することが初・中等教育法施行令で規定され，2007年より学校に配置され始めている。2012年現在，初等学校には3457名の栄養教師が配置されているが，これは学校給食を実施している初等学校に1人ずつ配置されているとした場合，配置率は58.6%となる。同じく中学校は18.7%，高校は23.2%で，中学校での栄養教師の配置が相対的に最も遅れている。[19]

2　インタビュー調査の概要

2010年９月から2011年５月にかけて首都圏にある中学校６校において，担任教師（以下，特に断りがない限り，教師とする）と栄養教師（栄養士）に対し，インタビュー調査を実施した。いずれの学校も生徒数が1,000人を超える大規模校である。１校につき，教師と栄養教師（栄養士）１名ずつ，合計12名に対し，インタビューを実施した。本論文ではこのうち，教師を対象とした調査結果を分析することとするが（表２），教師Ｂと教師Ｅのインタビュー時には一部，または全体にわたって栄養教師（栄養士）と教師が同席する形のインタビューとなった。インタビュー場所は職員室，特別室，栄養教師（栄養士）の事務室や食堂，又は教室である。

インタビュー時点で担任をしていない教師には担任をしていたときのことを想定して回答してもらった。原則として現在の勤務校での状況を中心とし，一部，過去の勤務校のことも念頭にしてもらった。

表2　調査対象者の概況

調査対象	身分	性	給食実施場所	学校名	配食場所の好み
教師A	担任教師	女性	教室	e中学	教室
教師B	担任教師	男性	併用	c中学	食堂
教師C	担任教師	男性	併用	a中学	教室
教師D	担任教師	女性	教室	b中学	食堂
教師E	担任教師	女性	食堂	d中学	食堂
教師F	担任教師	女性	食堂	f中学	教室

3　学校給食の目的への認識

（１）　学校給食の目的

学校給食の目的は法的には前述の通りであるが，実際に学校で勤務する教師達の考えを探ったところ，栄養面からの指摘，貧富の格差是正，共働き家庭の増加による弁当持参の困難性，礼節教育などが挙げられた。６人の教師の中では給食が教育ではないとする積極的な回答は見られず，うち５名の教師にとって教育であるとの認識が共有されていた。その要因の一つとして考えられるのは実際に自分たちの「クラスに入ってずっと給食指導をしなければならない」（教師Ｄ）からだと思われる。つまり，好むと好まざるに関わらず，教師とし

て給食指導をしている現実がある以上，教育活動であると見なされるということである。

栄養面での指摘は，家で弁当を作って持たせるとなると親も偏食をすることがあるので子どもたちの栄養のバランスが偏るが，学校給食は専門家が栄養のバランスとカロリーを計算して献立を作成してくれているとの考えに見られるものである。特に生徒の偏食問題の改善につながるとの意見がみられた。

実質的に弁当を持たせることが困難な家庭が増加しているのは近年，韓国社会で共働きが増加していることによるものである。女性就業に対する見解をたずねた調査では家庭の状況に関係なく女性が就業することを肯定する回答は，2002年で40.9%だったのが2009年には53.5%にまで上昇しているように[20]，社会状況の変化によって給食の需要が高まっている。このような状況下，給食を中断することは難しいであろう。

貧富の差の解消について意見は無償給食にも関連するところである。

> *特に地域的には，私たちのような地域は両親の余裕があります。だけど，少し暮らしが大変な地域の場合は学校給食がなければ餓えるようになったりする生徒が本当にたくさんいるんですよ。家で（食事を）準備してやったりできないので。そのような面では本当に肯定的に，その点が給食をする目的ではないかという考えになりますね。(教師 B)*

韓国では特に1997年のIMF危機以降，大幅な社会構造の変化により経済的格差が広がっているが，給食自体が教育というよりも，給食によって学校教育が維持されているという側面も存在する。韓国で無償給食の要求が高まってきたのはこうした社会的不平等を緩和するためといった理由も見いだされる。

(2) 教育ではないとの立場

6名の教師中，給食が教育とははっきり言い難いと回答したのはと教師Fであった。食堂で実施される給食において生徒が給食当番を担当することもないのならば，それを教育活動といえるのかどうか筆者が尋ねたところ，教師Fからは以下のような回答が返ってきた。

> *給食が教育活動という考えが韓国は少ないと思います。うん…保育に近いという感じ？だから教育というよりはただ食べるのを準備してあげる，*

保育といいますね。保護し育ててやるこのような段階。ただ子どもたちにご飯を食べさせる，このような概念に近い…これを通じて何か教育をさせるという内容は韓国のような場合はなく，単純に秩序…。何か，食べ物の摂取にあって感謝を感じるようにさせるとか，おかずを等しく食べるとか，食事礼節を教えるとか，このようなことではないと思います。(教師F)

このように語るとともに，学校給食の目的として子どもたちによりよい食べ物を平等に食べさせることなどを挙げている。あくまでも生徒に食べ物を食べさせることが目的であるとしているのである。給食を教育と認識しない考えは，栄養教師が普及している初等学校と違い，勉強中心となる中学校や高等学校では一般的だとする見方もある。[21]

教師Eは，給食は栄養バランスのとれた食事を子どもに提供するために始められたものであるが，国民の所得水準が向上し，親の意識が高くなったならば必ずしも学校給食をしなくてもよいと考えている。韓国ではこれまでなし崩し的に学校に給食が導入され，その指導が教師の役目とされてきたため，教師の中にも戸惑いがあるというのである。初等学校の場合は別として，中学では栄養教育や礼節教育といった側面から教育との認識がなされているものの，学校構成員間での共通認識は弱い。これは学校給食導入が共働き家庭の増加をはじめとした社会状況の変化という現実に対応するためであったことと関係していると思われる。

4　韓国の学校における給食指導の特徴

(1)　給食が実施される場所

学校給食が実施される場所として教室と食堂が挙げられるが，実施場所によって給食指導の方法は自ずと異なってくる。表3によれば，食堂の設置率は地域によりかなり差があることがわかるが，大規模学校が集中しているソウルや釜山といった都市部で学校食堂設置率が半数にも達していない。[22] 逆に言えば，それ以外の地域ではかなり学校内に食堂が普及していることがわかる。本調査の対象となった担任教師が勤務する6校のうち，食堂配食を実施している学校が2校，教室配食を実施している学校が2校，食堂はあるが全生徒を収容しきれないために教室配食を並行している学校が2校であるが，両方の配食方法を実施している学校以外でもほとんどの担任教師は前任校などで現任校とは異なる配食方式を経験してきている。

表3 自前の食堂を持つ学校の割合

地域	学校数(初・中・特殊学校)	設置学校(%)
ソウル	1277	564 (44.2)
釜山	626	253 (40.4)
大邱	422	398 (94.3)
仁川	287	261 (90.9)
光州	463	422 (91.9)
大田	286	205 (71.6)
蔚山	217	217 (100.0)
京畿道	2015	1743 (86.5)
江原道	646	531 (82.0)
忠清北道	979	728 (74.0)
忠清南道	950	833 (87.7)
全羅北道	763	524 (68.6)
全羅南道	857	744 (86.8)
慶尚北道	475	391 (82.3)
慶尚南道	742	587 (79.1)
済州道	181	181 (100.0)

『京郷新聞』2008年4月23日、15面参照。食堂設置学校の割合は全体の学校数の中での割合を示す。なお、全体学校数について、教育人的資源部(当時)発行の『教育統計年報』と若干の相違が見られる。

今回のインタビュー結果や，筆者が過去に行った担任教師や栄養教師（栄養士）へのインタビュー，給食実施時の参与観察[23]からわかるのは，学校給食への担任教師の関与が最も必要なのは教室配食であるということである。教室配食では原則として給食実施毎に担任教師が教室で生徒による配膳作業に立ち会い，場合によっては生徒と共に食事を共にすることになっている。先行研究では教室での給食は調理時間が経ってから配食が行われるため，料理が冷めやすく，衛生的にも問題があるとされている[24]。それに対し，食堂配食では生徒はトレーを持って配食場所に並び，調理員などから器に料理を入れてもらってから各自，席について食べることになる。但し，首都圏をはじめとした地域の大規模学校では全校生徒を一度に収容できるだけの食堂を有する学校は希であり，入れ替え制を取っている。従って，食堂に行っても並ばねばならず，時間がかかる[25]。また，食べ終わるとすぐに次の生徒に席を譲らねばならない不便がある。食堂で食べる場合は担任教師が配食作業を指導する必要がなく，全教員が当番を決めて交代して食堂で給食指導をすることが多いので，一般的に食堂配食のほうが教師の負担が少ないとされる。

（2） 給食指導の特徴－日本との違いに注目して－

食堂配食と教室配食に共通しているのが食事を始める時に「いただきます」で一斉に始め，「ごちそうさま」で一斉に終える必要はなく，準備が整った生徒から食事を開始し，食べ終わったら各自で下膳し，自由時間になるということである。実際に筆者がこれまで数校の中学校，小学校での給食活動を観察したところでも日本のように「いただきます」の挨拶でクラス一斉に食べ始め，「ごちそうさま」をするまで先に食べ始めた生徒も待っているやり方は見られなかった。今回のインタビュー調査では，複数の教師によれば初等学校ではクラス全員の準備が整ってから一斉に食事を始めることが多いとのことであったが，筆者の調査・観察の範囲ではそのような初等学校は見られなかった[26]。

こうした配膳方式に対し，筆者が「日本では全員が食事の準備を終えるのを待ってから食事を開始するが，これについてどう思うか」と尋ねたところ，教師Cは自分のクラスでも是非やってみたいと答えるなど，肯定的な意見も得られたものの，ほとんどの教師からは「軍隊式」である，先に配膳を終えた生徒の料理が冷める，生徒から反発が出るとの回答がなされた。

クラスで一斉に始めて終えるということができない要因には以下のような要因が挙げられる。

私の考えでは（韓国でも）初等学校ではそのように（一斉に食べ始め，一斉に食べ終わるような）指導することもあると思います。しかし，ここ（中学校）は何というか，なんというべきか，忙しくて皆を待つことができず，（配膳を）受けて一緒に食べるのも良いのだけれど，まず（配膳を）受けた子どもは食事がさめるではないですか。そのように考える時，（配膳を）受けた順序で食べます。さらに，なぜなら一度に食べ，一度に（食器を）返却する時，煩雑さがあるじゃないですか。だから先に食べて順番通りに（生徒）を回さなければというのかな。昼食時間が大概，短いです。（教師D）

日本と韓国では食事をする際の文化が異なるということ以外に，一斉に始めたり終えたりするやり方では効率性が低下するという認識である。筆者は韓国の学校掃除について考察を行った際，クラスみんなで掃除をやり遂げるということよりも「きれいにする」という，掃除本来の効率性が教育の場でも重視されていると指摘したことがあるが[27]，給食指導といった教育活動の中でも効率性が考慮されていることを見ることができる。

5　学校給食に見る指導観―給食の実施場所による指導観の違い―

（1）　食堂配食を好む理由―教室配食の問題―

配食場所の志向については3人の教師が食堂配食を希望し，残り3人の教師が教室配食を希望している。教師が食堂配食を希望する最大の理由は，教室配食の場合，本来教師にとって休憩時間である昼休みに毎日生徒指導をしなければならない点である。教師Eは以下のように述べている。

教師E：教師達は食堂で食べるのを好む方が圧倒的に多いです。というのは教室でご飯を食べるとなると，教師が子ども達と一緒にご飯を食べると

いうことになりますが，教師個人にはその時間が食事時間ではなく，教育の時間になるのです。自分の食事が安定的になされないのです。そのため，不便に感じられ，教室に食べ物のにおいがするために不便に感じられ，子ども達がきちんと管理できないでいると食べ物が（床に）落ちていて。そのようなときに（生徒が）きれいに処理ができないために，教師がすべて（処理を）しなければならないのですが，そのように教師がそれをするほど…。私たちは日本の教師のように教育業務だけを担当するのではなく，行政業務も担当するので，大概負担に思われます。

筆者：それではどのように…。教室で配食するときは「自分はあまり（指導に）行きたくない」と？

教師E：そうです。胃腸病にかかる方もおられますが，（指導に）行きたくないけれども行かなければならないでしょ。義務的に。だから胃腸病にかかりますね。私もそのような場合，（教室の）前のほうで食べずに後ろで食べるじゃないですか。（前で食べると）子ども達が，40名になる子ども達が，私がご飯を食べるのを見つめるじゃないですか。だから（教室の）後ろで後ろの席の子ども達と一緒に食べます。（教室で）子ども達と一緒に食べるのは人間的ではないと思って…。もし（自分の時間割で）4時間目が空いていれば先に食べてから（給食時に教室に）入ればよいのですが，いつもそのようにはできないので…。

ここでは韓国の教師が授業を行うという，本来の役割以外に様々な行政業務に負われている姿が映し出されており，それに加えて本来休憩時間であるはずの昼食時間にまで生徒と関わらなければならない現実が示されている。この教師は日本の教師が教育だけを担当していると誤解しているところがあるが，別の言い方をすれば韓国の教師が自分たちのことを本来の教育業務に専念できないほど業務が多いと認識していることを示しているとみることができよう。[28]

さらに，こうした認識がなされる要因についてもこの教師は以下のように語っている。

子どもの教育は食卓の上からの教育[29]からはじまるということに共感はしますが，元々韓国の教師は90年代後半から給食が普遍化してきたといいますよね。ずっと給食指導をその前まではしてこなかったのに，（今になって）しようとするので業務が過重になるのですね。だから教室でするのを…

最初から30-40年からしてきたというのであれば当然なこととしたでしょう。私は今でもそうです。教師が子ども達とご飯を一緒に食べるようにしたがっているのならば政府や上級機関で教師の他の業務を少し軽減してやらねばなりませんよね。そうでない状態で（給食指導を）しろといえば食事時間が楽しくなく，先生が楽しくなければご飯を食べている子ども達も楽しくないじゃないですか。そこで教育的に良くない効果もあると思います。（教師E）

この主張では決して，この教師は子どもが嫌いだから生徒の前で一緒に教室で給食を食べたくないと主張しているのではない。韓国では学校給食の普及は教師集団の合意によるものではない。「行政業務」などをはじめとした，「教育業務」以外の過剰な業務量によって教師が追い込まれている中で，給食まで教師の役割ということがなし崩し的に決められてきたということであり，教室配食における給食指導が教師に大きな業務的圧力となっているのである。

実際には教師Eが現在勤務する学校ではすべての生徒が食堂で食事をしているので，このような状況に立たされておらず，月に1，2回の当番の時に給食室で指導にあたっているという。

教師の負担を増加させていると考えられる教室配食であるが，教室配食でありながらも給食時に自分のクラスで給食指導を行わない教師もごく一部であるが，存在するという（教師Fの話より）。その反面，教師Bは教室配食を行っていたときのこととして，教室で指導するのは負担であるものの，以下の理由から給食指導を続けていたという。

子ども同士（だけ教室にいさせて教師が）指導をしなければ一番大きな問題は何かといえば，強い者がうまいものをたくさん食べ，まずいものは弱い者が食べるしかありません。教室で給食指導をしなければそのようになることをはっきりわかっているのに面倒だとか，しんどいといって（給食指導を）しないわけにはいきません。だから要件が整っていないので当然しなければならないと考えます。もししなくてもよく，学校の食堂で行われるとするならばいいのですが，要件が整っていないので私たちが受け入れている，そう考えます。好きでするのではないですよね。（給食指導は）好きですることではないですが，する必要を感じますね。しなければならない義務感やこのようなもののために…（教師B）

担任教師がもし教室に行かずに生徒だけが給食活動を行った場合，生徒同士の力関係が食事の量に直接反映してしまう場となる恐れがあるのである。教室配食の弊害を感じながらも指導の必要性は認識されている。

その他，教室で給食を実施すると食べ物の臭いが残ったり，残った食べ物が教室のゴミ箱に捨てられたりして教室環境が悪化することも食堂配食を好む担任教師によって指摘されている。

ここでの議論をまとめると，食堂配食を希望する担任教師はその教育効果を理解していることによるのではなく，むしろ教室配食が教師の日常業務を圧迫するという理由から食堂配食を望んでいると理解できる。特に現在，多くの教師が中学生の頃には給食を経験しておらず，導入されてからまだ時間が浅いということも教師にとって給食指導への拒否感が強い理由になっている。また，そうでありながらも給食指導の必要性は教師に認識されているのである。

(2) 教室配食を好む理由

本調査では明確に食堂配食よりも教室配食を支持したのは3名の教師であったが，食堂配食を支持する教師Dも教室配食を肯定的に見ている。今回の調査ではメディアや先行研究が言うように，教育現場では必ずしも食堂配食を支持する意見一辺倒というわけではないことが明らかとなった。

教室配食を好む最大の理由は，給食指導を行えるといった教育的側面からのものが挙げられている。現在，教師Fは食堂配食を行っている学校で勤務しているが，教室で給食指導をしていたことを思い出しながら以下のように述べている。

> *毎日毎日指導するのですが，私たちの子ども達（生徒）を見ることができるので…。子ども達がご飯を食べること，どのように食べているか，私が干渉することもできますし。偏食をするなと話もできるし。食べることも日々，チェックできるし。それから配膳する間も10分程度，配膳する時間に（教室で）立っていれば，子ども達みんなが（配膳を終えて教室に）入ってきた後には，私は教職員食堂でご飯を食べに（下の階に）降りていったのですよ。[30] ここの学校（現在の勤務校）は（食堂で）月に2回程度指導しますが，私の（指導の）順番が回ってくる日は全校生徒がみんなご飯を食べられるように秩序指導をするので，子ども達が何を食べているのかを見るのではなく，きちんと列に並んでいるか，配膳されて自分の席で座*

って食べているか，食べ終わってからは空間が狭いために早く席を立ってのけてくれ，残飯をたくさん残さないように…，このような程度のことを隅々にまで立って先生毎に分かれて指導をするのです。私の場合は扉の前で，子ども達が入って行くのを（食堂が込み合って）窮屈にならないように適当な線でストップさせて待たせ，その次の生徒に今行けと，またその次の生徒に行けというのでして，私が知らない子ども達，すべての子ども達を皆統制するので，事実は給食指導というよりは秩序指導でしょう。それであまりおもしろくありませんね。だけど，自分たちの生徒が食べるのを指導するときは，なぜこれは食べないのかとか，均等にみんな食べなければいけないとか，このような話をすることができたのでずっと良かったですし，毎日（給食指導を）するのはしますが，私と関係のあることだから構わなかったです。(教師F)

ここからわかるのは，食堂配食の場合は一つの場所で全校生徒の給食を指導するので，教師が当番日を決めて交代で指導すればよく教師の負担は軽減されるが，実際には食べることに関する指導ではなく，「秩序指導」と呼ばれる，交通整理のような指導になってしまい，やりがいが低下するということである。また，教師Aは食堂のように並んだりして食べるのに時間がかからないため，教室配食は効率的であるとし，生徒指導の側面からもよいと主張している。ただ，必ずしも生徒と同じ場所で給食を食べることにこだわっておらず，4時間目が空いているときには教職員食堂で先に食事をしたり，教室で生徒が給食を食べている中で持参した弁当を食べることもあるという。少なくとも中学校では担任教師が生徒と空間を共有しながら同じものを食することと，給食指導は別と考えられていることがわかる。また，給食指導の方法は学校毎，教師毎に多様であることも伺える。

一方，教室は元々ご飯を食べる場所ではないとし，衛生的な面からも食堂配食を支持する教師Dでも教室配食の持つ重要性を認識することがあるという。筆者が，学校給食が重要だということをどこでどのように思うようになったかと尋ねたところ，この教師は以下のように回答した。

この学校に来て毎日教室で給食指導をしながら（給食指導の重要性についての考えが）生まれてきたと思います。その前の学校で，食堂で食べていたときには重要な教育指導だと，そんなに心に届きはしなかったんです

よ。各自が別々に食事をしていたので。教室では一緒に食べるので…。
(教師 D)

この教師は教室配食の大変さをよく認識し食堂配食を志向しているにも関わらず，実践を通じて教育的視点から教室配食の長所を認識するようになったのである。

ここまでの考察で，教室配食と食堂配食への意見から教師のそれぞれの給食指導に対する考え方を明らかにしてきたが，同時に学校で方法が定められていない限り[31]，指導の方法は教師毎に様々であり，教師集団が学校給食について統一した認識を共有していないことが浮かび上がってきた。そこから韓国の教師は個々の指導観が尊重されているのではないかということが考えられる。次節では教室配食が行われる場合の生徒の役割分担をどうするかという点から教師の指導観について見てみたい。

(3) 教室配食での当番—自律性が重んじられる韓国の教師—

食堂配食であれば，実際に配膳を行うのは給食調理員であったり，手伝いに来ることを了承した保護者であったりする。又は一部の生徒に何らかの「特典」を与えて行わせることもあるという。しかし，教室配食の場合は自ずと生徒が配膳作業の中心を担うことになる。どのようにして担当を決めるかについては，先に見たように，教師によって異なる。教師達の話によれば，クラス内で給食当番のために作った複数のグループ毎に一定期間毎に配膳当番を交代させていく方法や，生徒の中から担任教師が任意に当番を決め，1学期間，又は1年間同じ生徒達に継続して給食を担当させるやり方などがある。教師にとっての教室配食の困難さを感じている教師Bは，6名程度の給食当番を一定の期間毎に交代していくのが一般的と述べる。それは全員が配膳作業を経験することにより，全員同じ量を平等に配膳することの難しさを理解させることで，他人の気持ちを理解させることができるからであり，これも教育だと述べる。

一方，教師Dは給食当番を1学期間固定している。毎回当番を交代させると，当番の生徒は一人一人への料理の配分量を公平にするために試行錯誤することになるが，「1学期に1回ずつすれば，その子どもがある程度慣れてしまうと試行錯誤なく，平均して分配」(教師D) できるようになるからである。こうしたやり方を採る教師達によれば，給食当番に充てた生徒には他の役割は回さないなど，一定の配慮がなされることが多いようである。この方法は生徒

の「専門性」を期待したやり方であり，いわば教育的観点よりも効率性が追求されたものであるといえる。

こうした当番の決め方をはじめとして，教師がどのように給食指導を行うのかは個々の教師の権限が強く，同じ学校でも教師により千差万別であり，「原則があるのではなく担任の先生が，これがよいと思う方法で指導する」（教師B）というのが現実である。これは給食指導にとどまらず，学級指導における担任教師の裁量の幅が広く（韓国語では「自律性が高く」），同じ学校でも教師毎に異なることが考えられる。[31] たとえば，教師Ｆは日本ではおなじみの「班活動」について，以前は班を作って授業の中で活動させたり，いわゆる「班日記」を作ってその添削を行っていたというが，学業中心の学校生活の中で学級経営上，班活動をさせることの意味を感じなくなってきたという。

こうした教師による指導法の違いはどこから生じたものだろうか。筆者が管理職や先輩教師から班活動を作ったり清掃活動の当番を作るように言われたことがないかたずねたところ，教師Ｆは以下のように回答した。

> *そのようなことはありません。韓国でそのようなことに対して強制的に実行する部分はありませんし。（韓国では）自分の学級に対しては自律権が非常に強い方だと思います。それがある面ではよい面でもあり，悪い面でもあるのですが，学年全体での議論の過程を経て自律的に一緒に何かをしようという心がよく合えばよいのですが，そうでない場合には，するクラスはするし，しないクラスはしないし，互いの疎通はあまりできないほうですし。互いにそれをもってフィードバックをしたりするのもないと思いますし。*

この教師は研修会などで個別に学んだことを実際の教育の場で実践し，生徒の反応からフィードバックを受けているが，これまで学校の中で共同で何かをしようとして教師同士が結集したこともないし，教師の中から自発的に何かしようというものも出てこないという。これがひいては給食指導のやり方が教師毎に異なることにもなり，ごく少数の教師に限られるが，給食指導をしないことも教師の「自律性」に基づくものとされるのであろう。特に中学校では給食の歴史が新しいことがあり，韓国の教師の特徴と思われる「自律性」の高さが給食指導の場面で大きく表れているのである。

おわりに

本論文ではインタビュー調査によって，学校給食指導における韓国の中学校教師の指導観や教育観を考察してきた。特に，給食が行われる場所―配食場所―との関係から教師の指導観，教育観に注目したところ，以下の点が明らかになった。

まず，法的にも政策的にも学校給食は教育の一環であるといわれるものの，これは教師たちが議論し合った結果のものでもないし，学校給食の普及が現場教師の合意によって進められたものでもなく，教師の労働環境を考慮しながら進められたものではないということである。その結果，特に教室での給食指導が教師の日業業務を圧迫し，教師のストレスにつながっている。先行研究でも「教師に対する処遇改善は教師自身のみならず，学校給食の目的を達成するのにも肯定的に作用する[33]」と述べられているが，特に中学校の教師を取り巻く「多忙さ」が，給食も教育の一つだとする認識を形式的なものにしてしまっているといえる。

二点目は，表面的であるかどうかは別としても，いったんは給食も教育であるという認識が多くの教師に共有されているが，日本とはその内容に違いが見られるということが言える。それは給食を始めるときと終えるときに，日本で一般的に見られるような，全員で一斉に食べ始め，終えるときも全員で挨拶をしてからという指導が中学校では一般的になされていないことに象徴的に表れている。韓国では限られた昼休み時間をより有効に，効率的に用いることが優先されているのである。

三つ目に，給食が行われる場所については食堂配食を支持する教師も教育的観点から見たときには教室配食における給食指導の必要性を認識しており，さらに教室配食の教育的意義について認識している教師も存在する。その意味では食堂の整備を進めていきさえすれば学校給食は充実するとは言えない。上で挙げた教師の業務負担の問題はあるものの，教室での給食は生徒と教師のコミュニケーションの機会にもなるし，教師の気づきの機会ともなっていると認識されている。

四点目は，一人一人の教師の給食指導をはじめとする生徒指導，学級指導における裁量範囲は広範である。学校として取り決めがある場合も存在するものの，基本的には教師の「自律性」が広く尊重されている。これは教師の専門性が社会的に容認されていることの反映と判断することが可能であるし，教師の

裁量権が広いこと自体は望ましいことと受け取れる。反面，志を同じくする教師が協力し合って子ども達を教育していくという教師同士の「連携」が生まれにくいことも確かである。学校給食を明確に教育の一環と合意した上での教師集団による指導体制が構築されにくい。教室配食に教育的意義を持ちながらも，生徒と共に食事まですることが一律化されていない点は現実の給食指導の内容が教師によりまちまちになるという結果をもたらす。今後，こうした教師の指導観，教育観が醸成された背景を探ることで韓国の学校教育の特徴を明確にしていくことができると思われる。

本論文では中学校とはかなり違いが見られるであろう初級学校の給食指導の状況について触れることはできなかった。また，学校給食を学校全体で推進していく上で中心となるべき栄養教師の教育観を見ていくことで一般教師とは異なる点が見えてくるものと思われる。こうした点を今後の課題とし，学校給食から日本と韓国の教師の教育観をより詳しく探っていきたい。

注

(1) 2005年度末時点で「委託給食」を実施する全国の小中高等学校は15.4%であったが，2011年度末には2.8%にまで低下し，「直営給食」化が進行している。特に初等学校で「委託給食」を実施しているのは全国で1校のみである（教育科学技術部『学校給食実施現況』各年度版参照）。

(2) 정명옥「학교급식의 현황과 과제」，주간 교육출판사『학교운영위원회』(鄭ミョンオク「学校給食の現況と課題」週刊教育新聞社『学校運営委員会』）105号，2008年，p. 51参照。

(3) 石附実『教育の比較文化誌』玉川大学出版部，1995年，p. 25参照。

(4) 백정자・류상희「학교급식에 대한 초등학교 교사들의 인식」，한국실과교육학회『한국실과교육학회지』(白チョンジャ・柳サンフィ「学校給食に対する初等学校教師たちの認識」韓国実家教育学会『韓国実科教育学会誌』）15(2)，2002年，pp. 155-172参照。

(5) 김숙희・이경애・유춘희 등「초・중・고등학교 교사들의 학교급식에 대한 인식조사」，한국영양학회『한국영양학회지』(金スッキ・李ギョンエ・柳チュンヒら「初・中・高等学校教師の学校給食に対する認識調査」韓国栄養学会『韓国栄養学会誌』）37(8)，2004年，pp. 701-711参照。

(6) 박문경・양일선・이보숙・김영신「학교유형별 급식 배식장소에 따른 급식품질 속성 및 전반적인 만족도 분석」，『대한영양사협회 대한영양사협회 학술지』(朴ムンギョン・ヤンニイルソン・李ボスク・金ヨンシン「学校類型別給食配食場所による給食品質属性，及び全般的な満足度分析」大韓栄養士協会『大韓栄養士協会学術誌』）16(2)，2010年，pp. 83-99参照。

(7) 配食場所とは，配膳場所のことだが，ニュアンスとしては給食を摂る空間をも

含んでいる。

(8) 이경아 • 류은순「배식장소에 따른 부산 일부지역 중학생의 급식만족도 평가」, 한국식품영양과학회『한국식품영양과학회지』(李ギョンア・リュウ=ウンスン「配食場所による釜山一部地域中学生の給食満足度評価」, 韓国食品栄養科学会『韓国食品栄養科学会誌』) 34(2), 2005年, pp. 209-218, 及び오유미・김미현・승정자「전주지역 중학생의 학교급식에 대한 만족도, 메뉴기호도 및 개선사항 조사」, 대한영양사협회『대한영양사협회학술지』12(4) (呉ユミ・金ミヒョン・スン=ジョンア「全州地域中学生の学校給食に対する満足度, メニュー嗜好度, 及び改善事項調査」大韓栄養士協会『大韓栄養士協会学術誌』) 12(4), 2006年, pp. 358-368等参照。

(9) 例えば, 송현정『중학교 학교급식의 식당과 교실 배식의 비교 연구-급식장소별 학생만족도 및 환경위생면, 잔반비교중심으로-』단국대학교 교육대학원 석사학위논문 (ソン=ヒョンジョン『中学校学校給食の食堂と教室配食の比較研究—給食場所別生徒満足度, 及び環境衛生面, 残飯比較を中心に—』壇国大学校教育大学院修士論文), 2009年。

(10) 「食堂配食」とは, 学校の調理場に隣接する食堂で配膳活動をはじめとした一連の給食活動が行われる形態のこと。それに対し,「教室配食」はクラス毎に分配された食事を教室に運搬し, そこで配膳作業を行い (教室前の廊下で実施することもあり), 教室内で摂食する給食方法のこと。食堂がなかったり, スペースが不足している場合, 全校生, 又は一部学生が「教室配食」となる。本論文では原則として韓国語の直訳である「食堂配食」,「教室配食」の用語を用いる。

(11) 송현정 문현경「중학교 학교급식의 식당과 교실 배식의 급식만족도와 위생상태 비교」, 대학지역사회영양학회『대한지역사회영양학회지』(ソン=ヒョンジョン・文ヒョンギョン「中学校学校給食の食堂と教室配食の給食満足度衛生状態比較」, 大韓地域社会栄養学会『大韓地域社会栄養学会誌』) 15(3), 2010年, pp. 369-378, 김숙희 이경애 유춘희 등「급식유형에 따른 중・고등학생의 학교급식 만족도」, 한국영양학회『한국영양학회지』(金スッキ・李ギョンエ・ユ=チュンヒら「給食類型による中・高等学生の学校給食満足度」韓国栄養学会『韓国栄養学会誌』) 36(2), 2003年, pp. 211-222, 이경아・류은순, 前掲論文, 2005年など参照。

(12) 박문경・양일선・이보숙・김영신, 前掲論文, 2010年, pp. 83-99参照。

(13) たとえば, 学校の食堂施設の整備状況が進んでいない状況を取り上げた新聞記事では,「教室が狭くて食器を持って通るとぶつかることもある」,「料理を教室に運んでくるまでに味が落ちる」,「給食を食べる時間が足りなくなる」などの児童の声を紹介し, 教室での給食 (教室配食) の問題点を指摘している (최승현「교실마다 밥 냄새 언제까지…」『경향신문』〈「教室毎にご飯の匂いがいつまで……」『京郷新聞』〉 2008年4月23日付, 15面参照)。

(14) 교육인적자원부『학교급식개선종합대책—국무조정실 개선과제세부추진계획—』(教育人的資源部『学校給食改善総合対策—国務調整室改善課題細部推進計画—』) 2004年, p. 16参照。

(15) 小学校は日本と同様, 学級担任がほとんどの授業を担当するなど, 担任と児童

との関係が濃い上に中学校と比べ学習中心の教育体制にはなっていない。また，韓国では学校給食の歴史が最もあるのが初等学校である。反対に高等学校では教科学習が中心となり，給食を教育の機会と捉える見方も弱くなると思われる。その意味で，中学校は給食がどのように位置づけられているかを見る上で最も有効であると思われる。

(16) 왕제선「정책이슈 확산의 정치과정: 무상급식 논쟁 사례를 중심으로」한국정책학회『한국정책학회 춘계학술발표논문집』(王ジェソン「政策イシュー拡散の政治過程：無償給食論争事例を中心に」韓国政策学会『韓国政策学会 春季学術発表論文集』2012)，2012年，p. 4参照。

(17) 学校給食無償化問題は，ここで見るように教育や福祉，それと関わる「食」に対する国民の関心の高さを象徴しているとの解釈のほか，韓国の政治構造上の問題との解釈も可能であろう。なお，当時の呉世勲 前ソウル市長（保守派）が辞職した後の市長選挙では進歩派の朴元淳が当選し，給食無償化の決済を下した。

(18) 경기도교육감 김진춘『학교급식관리 실무』(京畿道教育監 金ジンチュン『学校給食管理実務』)，2007年，p. 3参照。

(19) 学校数，栄養教師数は韓国教育開発院が運営する「教育政策ネットワーク情報センター」サイト（http://cesi.kedi.re.kr/index.jsp）を参照。

(20) 통계청『한국의 사회지표 2010』(統計庁『韓国の社会指標 2010』) 2011年，p. 249参照。

(21) 今回の調査実施にあたり，調査対象教師の紹介など，コーディネートしてくてくれた韓国の教師の話による。

(22) 2012年8月の『国民日報』記事によれば，ソウルでは食堂が未設置の学校は中学で26.9%，高校で4.1%であるが，2014年までにこれらのすべての学校に食堂を設置する予定であるという（김수현「학생식당 없는 서울 중・고교에 예산 지원」『국민일보』〈金スヒョン「学生食堂がないソウルの中学・高校に予算支援」『国民日報』〉，2012年8月27日付，9面参照)。

(23) 本研究に直接用いていないが，過去に調査した学校は4校の首都圏の初等学校（食堂配食1校，教室配食3校），1校の大邱地域（教室配食）の中学校である。

(24) 이경아・류은순，前掲論文，2005年，p. 217，송현정 문현경，前掲論文，2010年，p. 375など参照。

(25) 설유금『배식장소에 따른 중학생의 학교급식에 대한 만족도 연구』인하대학교 교육대학원 석사학위논문（ソル＝ユングム『配食場所による中学生の学校給食に対する満足度研究』仁荷大学校教育大学院修士論文)，2011年 p. 16など参照。

(26) 2009年3月に筆者が首都圏の初等学校の担任教師にインタビューした時の話では同じ学校でも担任によって形式は異なるとの話であった。全員で揃って食べ始める形式は低学年でよく行われているという。少なくとも，韓国では個々の生徒が銘々に給食を摂り始めることは普通のこととして教師に見なされている。

(27) 出羽孝行「韓国における学校掃除―現状とその教育的意義について―」比較教育風俗研究会『研究談叢 比較教育風俗』第12号，pp. 51-72参照。

(28) 金スッキらの量的調査では中学の教師は学校給食による業務量増加を大きな負

担と思っていないという結果が出ているが（김숙희・이경애・유춘희 등，前掲論文，2004年，pp. 706-707参照），どの程度給食指導に関わるかは一般的には教師の自由度が高いことを考えると，給食が教師にとって負担になっていないと明確には言えないだろう。

(29) 原文は「밥상머리교육」。すべての教育は食事をするときのしつけなどを教えるところから始まるとする考え。

(30) 韓国の学校では廊下で配膳作業を行っている場合があり，この場合も廊下でトレーに食べ物を入れてもらってから食事をするために教室に入るという意味と解される。

(31) 学校全体で生徒指導の取り決めをしている場合も存在する。教師Cの教師が勤務する学校では開校時に生活指導を重視することを決め，教師が生徒ともに動いて食堂で食事をすることを決議したという。したがって，食堂配食であるにも関わらず，教職員食堂はなく，毎日食堂で生徒とともに給食を摂っている。

(32) 韓国において給食指導だけではなく，学校での掃除活動における，教師毎による指導の裁量幅の広さや，教育と同時に効率性も重視されている点については，出羽孝行「韓国における学校掃除―現状とその教育的意義について―」比較教育風俗研究会『研究談叢 比較教育風俗』第12号，pp. 51-72を参照のこと。

(33) 김숙희・이경애・유춘희 등，前掲論文，2004年，p. 707参照。

キーワード　韓国の学校給食　教師の教育観